

自宅にいながらの日本語遠隔授業 松浦 康彦

・ 定年後の「半農半教」ライフを目指して

新聞記者生活 35 年の後、10 年ほど都心の女子大でメディア論などを教えているうちに早くも古希。二度目の定年が間近に迫っていた。お荷物老人になることなく、これから先の老後をどう過ごしたものか……。思案の最中、本屋で『半農半 X という生き方』という本に出合った。帰宅するや一気に読み終えた。しかし、具体的な段取りとなると、妙案が浮かんでこない。



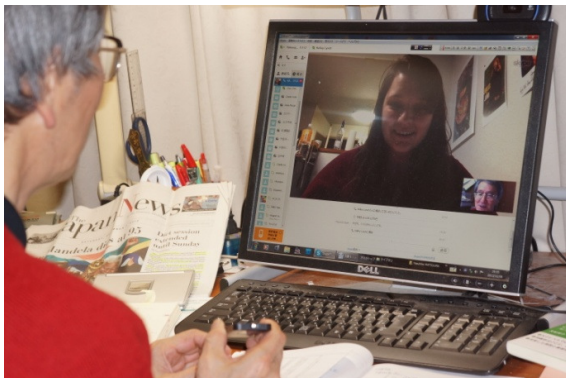
「半農」の方は何となく感触を掴めたものの、肝心の「半 X」が見当たらないのだ。そんな時、海外留学制度の第 1 期生として北京に送り出した教え子からもらった「上海で中国人学生に、日本語を教えています」というメールをふと思い出した。「そうか、畑を耕しながら、外国人に日本語を教える手もあるか……」。2012 年 3 月、最後の中国出張の機会を利用して、彼女の職場「上海・さくら日本語学校」を覗いた。帰国後、紹介してもらった銀座の日本語教師養成スクールにさっそく登録した。

しかし、日本語教育はもちろん、野菜作りすら経験したことが全くのシロウトだ。翌春から、甲府盆地を見下ろす山梨市牧丘の隔週末の農業スクールにも真面目に通った。畔道に足を取られながら、鍬を振るい、肥料を運ぶ、青空の下での力仕事は、体の節々が痛んだものの、それなりに爽快だった。

・ 日本語教師養成コースで悪戦苦闘

70 の手習いにとって、思わぬ苦戦を強いられたのは、むしろ日本語スクールの方だった。「音声学」「言語学」「語彙・意味論」。「そうか…」「なる

程…」と、若い女性講師の歯切れのいい講義に、うなずきながら聴き入るものの、せっかくの新知識はザルのように、頭からこぼれ落ちていく。



「初級指導法」「中上級指導法」…
…など教授法系の、実技付き講座となるとさらに始末が悪い。「その言葉は
未だ教えていないので、この課では使
えません」「もっとやさしい言葉で」
「ジェスチャーも交えて」……と、指
導教官から矢継ぎ早に示されるイエロ
ーカード。毎回、脂汗がにじみ出る思

いだった。

1年1か月の悪戦苦闘の末に、それでも何とか420時間の講習を終える見
通しがついた。「仕上げは現場でのオンザ・ジョブ・トレーニングで」と、勝
手に決め込んで、山梨日本語ボランティア協会に加盟願いを出して、ようやく
認めてもらった次第である。

・ 国際遠隔授業での挑戦が下地に

難題は受講生集めだった。短い期間だったが、米・コロンビア大で客員研究
員をしていた際に知遇を得た、日本語の達人な学生たちの顔が浮かんだ。文科
省など日本政府が、英語を母語とする大学卒業生を招き、各県の小中高に派遣
するJETプログラム（外国語青年招致事業）で来日したことのある若者たち
だ。赴任地でのお国訛りも混じっていたが、生きた日本語を身につけて米国に
帰った、たくましき元・ALT（外国語指導助手）たちだった。

北杜市の教育委員会に、「ボランティアとして日本語教えたいが」と、ALT
捜しを頼んだところ、ほどなくボストン出身で南アルプスの麓の白州町の小
中校で、英語助手をしているS君を紹介してくれた。そこから大泉町の拙宅ま
で車で40分近くかかる。二人で相談のうえ、インターネット回線を使ったテ
レビ電話システム Skype を使ったの、遠隔授業を採用する事に決まった。

半年後、カリフォルニア州から来たC君や、ケンタッキー州出身の女性ALTのLさんも加わった。さらに、大連外国語大の日本語とコンピュータの両学科を卒業し、川崎市の家電企業でカーナビの開発に携わっているJ君も引き受け、ようやく米中4人の受講生がそろった。互いの住居が遠く離れているので、4人別々のスケジュールで、日、月、木、金の、夜7:00から1~2時間の遠隔個人レッスンは何とか軌道に乗った。

実はネットを使った授業については、大妻女子大在職中の2008年に一度、中国・大連外国語大学とオーストラリア・シドニー大学の日本語修得学生と、大妻女子大生との間で、海を越えての遠隔授業に挑戦した経験がある。学生たちが一斉にパソコンに飛びついて回線が混雑する場合、途中で音声途切れたり、映像がフリーズしたりで、教室同士を繋ぐ大人数の本格的な授業は、当面まだ無理と判断し、Skype授業は未完のまま大学を去った。



・ 鼓舞された山梨県立大の先行例

来県して驚いたのは、山梨県立大学国際政策学部で、すでに「遠隔日本語教育プロジェクト」を立ち上げ、2007年から企業で働く外国人就労者のために、遠隔日本語教育をすでに県内で実施していた事だ。

2012年3月刊行の、50ページほどのマニュアル本『「遠隔日本語教育」のすすめ』の中で、同学部准教授の安藤淑子先生は、「県内に点在する在住外国人が近年急激に増えているものの、日本語教室が近くになく、山梨のような日本社会と隔絶して住んでいる外国人にとっては、Skypeによる学習はまたとない機会」と、むしろ過疎地域向けの授業法と推奨している。

最近のノートパソコンや、iPad、スマートフォンはカメラ付きなので、機器さえあれば県内のどこからでも繋がる。回線状況の急激な進歩で、今のところ画面がフリーズしたり、音声途切れたりすることはほとんどない。若者た

ちの方は日ごろこうした機器を使かいこなしており、多少のトラブルがあっても、機器操作に不慣れなわれわれのように動ずることもない。

- ・ どう教えるか…悩ましき教授法



だが、技術は進歩しても、IT 機器を使ってレッスンをどう進めていくかとなると、教授法はまだ手探り状態だ。例えば、米国人は「るび」を見ないと簡単な漢字でも苦労している模様だ。読ませて一応スラスラと読めても、本当に理解しているのか表情などが読み取れない場合には、英訳させ確かめている。日本語スク

ールでは、媒介語の使用はご法度で、ルール違反だった。

昨年、早稲田大学で非常勤講師として留学生の日本語指導をしている、銀座校の恩師の授業をゲストして手伝ったことがある。隣席のシンガポールからの学生に、英語であいさつした途端、「松浦さん日本語で……」とすかさずイエローカードが出された。

一方で「英語を媒介語とした間接教授法をとりいれ、初級から中級レベルの学習者には英語を使用して効率よく授業を進めます」と、媒介語の積極使用をうたっている日本語スクールもある。どれが正解なのか。

日本語スクールで習った〇〇メソッド、××アプローチ、ミニ・メモ練習、アーミー・メソッド、直説法、折衷法……など、教授方について教科書や参考書を改めてひっくり返してみたが、いずれも「外国語教育に唯一絶対の方法はない」だった。

若葉マークの新米日本語教師の、七転び八起き Skype レッスンが始まったばかりある。